

南部久子様

スポーツグランプリ受賞

第5回日本スポーツグランプリ受賞のため南部久子様が上京なさるとの連絡を山本道子様（回生山本平八郎氏夫人）より頂いたのは、表彰式（平成二十二年九月二十五日）の二日前のことでした。千里山会総会にご出席のため前年の十月に日帰り上京を果たされた折の記憶もまだ新しい内の再度の上京に驚きながら、取りあえず東京駅までお出迎えに参りました。

九十八歳というご高齢で早朝からの長旅はさぞお大変だったろうと案じておりましたが、これは杞憂に過ぎず、前回のときよりも更にお元氣そうに見え、満面の笑みに接して本当に嬉しくほっと安心しました。

大阪からはお孫さんの直美さんと日本マスターズ陸上競技連盟事務局長の岡桂子さんが付き添って来られました。直ちに幕張に向かい私も一緒にさせて頂くことになりました。表彰式には、天皇 皇后両陛下もご臨席になられるということを道中で初めて伺いました。

日本スポーツグランプリ賞というのは、日本体育協会が、長年にわたりスポーツを実践すると共に、広く国民に感動や勇気を与え、顕著な功績をあげられた中高年齢層の方に対して授与されるものです。（注千里山会13号誌143頁参照）

折から千葉国体の開催中で、表彰式が取り行われるホテルニューオータニ幕張には両陛下がご滞在になられるため、二時頃に到着したホテルでは警備の厳しい雰囲気を感じられました。久子様には休む間もなく、すぐ様お召し替えなどの準備を始め、表彰式に備えて頂きました。付き添われる直美さんと晴れ姿の久子様とを会場に通じる廊下までお見送りし、私まで胸の高鳴りを感じる思いでホテルを辞しました。

（寺澤美代子記）

表彰式の様子については、直美さんに寄稿して頂きましたので次に紹介させて頂きます。

表彰式に同行して

藤沢 直美

平成22年9月25日千葉県幕張のホテルニューオータニで日本スポーツグランプリの表彰式が行われ、祖母 南部久子の受賞に同行して参りました。

二度の骨折のため車椅子を手放せなかったことと、表彰式の一か月前の脳内出血の後遺症が残っていたせいで体調は万全ではありませんでしたが、ご支援下さった方々のご協力のお陰で式への出席を実現させることが出来ました。

天皇 皇后両陛下ご臨席のため、式の警備は想像以上に物々しく、会場への入場は受賞者と付き添い一名のみと決められていました。式場での諸注意と流れの説明を受けたのち午後五時より「鶴の間」で開催の式に臨みました。今回祖母と同じ賞を受賞される方々は9名おられ、その中で祖母は最高齢であり唯一の女性受賞者でした。

会場には正面に金屏風が置かれ後方にはご馳走が並

べられ、脚立を並べた報道陣や大勢の大会関係者の方々がすでに集まっておられました。

開会の挨拶のあと、早速森喜朗 日本体育協会会長による授与式が始まり祖母は最後の9番目に名前を呼ばれました、舞台の中央へ車椅子を進め表彰状と盾を受けると、森会長が小さな声で「南部忠平さんの奥様と申し上げ手よろしいですか。」と祖母にお尋ねになり、会場の皆様にご紹介して下さいました。小さなよめきと共に拍手をいただきました。

金屏風の前で会長と9人の受賞者全員で記念撮影をし、その後35名のスポーツ功労賞の表彰式、森田健作千葉県知事、文部科学大臣の挨拶と乾杯でしばし歓談となり、祖母のもとには沢山の方がお祝いを述べて集まって下さいました。

6時頃両陛下会場御着となり出席者によってきた花道の中をゆつくりと舞台へ向かわれ、私達は拍手でお迎えしました。祖母に気づかれた皇后さまは軽くうなずかれる様にお顔を傾けられ、祖母は大拍手でお迎えしていました。

受賞者は3列に並び順に両陛下にお声をかけていただきます。祖母は先頭の右端で番を待ちました。

両陛下と祖母は、祖父 南部忠平が勲章を賜わりました頃から交流があり、特に皇后様とは折にふれ贈り物を送り合うなど親睦を深めてまいっておりましたので

祖母との再会を本当に喜んで下さいました。また寺澤美代子さんのお書きになられた日経新聞の記事(編集部:この記事を 頁に掲載)のことにお触れになり、

「記事読みました。敦子さんの写真も載っていてとても興味深く拝見しました。」とおっしゃり、この事を後日寺澤さんにお伝えしましたら、殊の外喜ばれ、感激なさっておいででした。

スポーツグランプリ受賞者とスポーツ功労賞受賞者合わせて44名の接見を終えてご退席なさる時も、皇后様は、会場の花道の前列にいた祖母の側へ近寄って来られて手を握られ「どうぞお元気で」とおっしゃり、花道を曲って見えなくなるぎりぎりまで何度も振り返って名残り惜しそうに手を振って下さいました。まるで祖母だけに会いに来て下さったかのような錯覚さえ覚えるひと時でした。

パーテイの後の記者会見で、受賞の喜びのインタビューがありました。体調が万全でなかったこともあり、一言「うれしゅうございます。」と答えるだけにな

ってしまったことは少々残念でした。

翌日同じホテルにお泊りになられていた両陛下がお発ちになられるということで、ロビーには何十人もSPによる警備で緊迫した空気が漂っていました。一般人の私達は当然何メートルも離れた場所まで遠ざけられていたのですが、同行して下さっていた日本マスタース陸上競技連盟事務局の岡桂子さんが、祖母の気持を汲んで、関係者の方に向け合せて下さったお陰で両陛下をお見送り出来る場所へ移動することが出来ました。異例の計らいであったようです。お陰で最後にもう一度お目にかかることが出来ました。

エレベーターを降りてホテルの支配人やシェフと挨拶を交わされ、玄関に向かわれる途中、祖母に気付かれた両陛下は私達の方に近寄って来られました。

陛下が私のことを「お身内の方ですか」とお尋ね下さり、祖母が「孫でございます」とお答え申しますと、私に「お母様の記事を見ましたよ」とのお言葉を掛け下さいました。陛下のご公務は秒きざみと伺っていましたが、この間数分はあつたかと思われますほど、大変丁寧に接して下さい「おばあさまを大事にしてあげて下さいね。」とのお言葉もいただきました。

受賞の喜びはもちろんです。今回の受賞のお陰で両陛下にお目にかかれたことは祖母にとってどんなにか喜びであり励みになったことでしょう。

一ヶ月後には熊本でのグランドゴルフの大会の式にも出席いたしました。脳内出血の後遺症も右足に少し残るぐらいで殆ど良くなり、「千葉まで行ったのに肝心の国体も見ずにさっさと帰って来てしまつて。」とか、「両陛下をお見送りの時にパールのネックレスをしていなかった。」などと私は叱られっぱなしでしたが、それ程元気に回復していると思うと嬉しくもなりませう。百歳を目前に益々元気で精力的な祖母です。応援し助けて下さる全ての方に感謝とお礼を申し上げます。日経新聞に記事を書いて下さった寺澤さん、ありがとうございました。

藤原直美さんは南部久子様の孫で南部敦子さんの長女。最近、徐々に千里山会に入会して頂いている千里第三小学校卒の方々のお仲間。現在は堺市にお住まいです。

下の写真は森喜朗元首相 現日本体育協会会長より表彰を受けられる南部久子様と直美さんです。



日本スポーツグランプリ表彰 平成22年9月25日(土)

表彰状

大阪府 九十八歳

南部 久子殿

あなたは本年にわたり陸上競技を觀しまれ昭和54年に創設された

全日本マスターズ陸上競技選手権大会には当初から29回出場され

るとともに平成5年には80歳で初めて砲丸投げに挑戦されさらに

平成14年には90歳で世界記録を樹立されるなど日本陸上競技界

における女性の最高齢選手としての活躍は広く国民に感動や勇気

を与えました。

ここにその功績をたたえ日本スポーツグランプリを授与します。

平成二十二年九月二十五日

財団法人 日本体育協会会長

森 喜朗

文化

戦後間もない日、本の上級選手に強い女性選手がいた。おちやんこと南部敦子。彼女が活躍したのは、フィリピンの国際大会でも活躍し、現地の人々の目に温かくすがすがしい日本人の姿を焼き付けた。



アジア大会での南部敦子さん

吹田市の千里第一小学校で彼女と同級生だった私は、関東の同級生千里山会を通じて、彼女が日本人と知り合い、彼女の活躍を知った。戦後半世紀以上たつて、画題の心をなやませた彼女の大

輪の花のような生涯をいさへせている。敦子さんは1934年生まれ、三冠競走でその名を知られた父、南部正平さんと母、マユさんと間に生まれた。私は敦子さんより4年早く、一緒のクラスだったが、異身でスリムだった彼女が、その運動神経も抜群で、みんなのおじがこれの抱っこだった。その後、京都の光華女子学園の中高短へ進学した。陸上の才能を開花させた。52年には五種競技(砲丸投げ、走り高跳び、200メートル走、80メートルハート、走り幅跳び)で日本新記録を出して優勝。その

陸上選手、南部敦子さんの足跡を追う◇ 寺澤 美代子

フィリピンを駆け抜けた華

陸上選手、南部敦子さんの足跡を追う◇ 寺澤 美代子

の後の4回、自己記録を更新し、「新皇オリンピック」と称された。アジア大会で優勝して、54年5月、フィリピンのマニラで開かれた

比の関係を考えれば驚異に想像できる。戦時中、フィリピンは4年にわたる日本軍の占領下にあった。精神的にも肉体的にも大きな苦痛を受け、戦後日本人への憎しみは根強く残っていた。大会当時も日の丸でも見せぬ日本人を屈させることへの懸念は強く、警察は暴動を恐れたるべく日本人選手に警戒を

はフィリピン人選手以上の注目を集めた。彼女が競技場に現れたたびに大きな拍手が起り、男子学生はアイドルさながらに彼女を追いかけた。そんなマニラでの出来事を教えてくれたのは、アマチュア・アルボレー競走団副団長で、フィリピン系米国人で大会臨時はアナウンサー、マニラ大学3年生だった。彼は彼女の面影を忘れられず、69年に仕事で来日してすぐに消息を辿った。だが、やがて新聞で彼女の死を知り、引退して結婚し、1男1女の母となって間もなく、彼女は交通事故で亡くなったのである。

私が母と父に敦子さんに連絡を取って写真を手に入れ、それをアルボレーさんに手渡した。14歳番のセッケンを付けた敦子さんの姿に、彼は「大会時の日々が心に浮かんで」と感激し、進んだ時代の同級生や後輩を通じて当時の現地の新聞記事や写真を探して送ってくれた。遺族との対面取り持つ昨年秋に千里山会の総会に訪ねた敦子さんと敦子さんの姉さんをお呼びし、アルボレーさんと感懐の面も実現した。彼は「敦子さんの存在がどれほどフィリピン人の反日感情をやわらせたか、どんな政治的動向に有効だったか、当時はおどろかされたけれども、いかなかったでしよう」と涙を流しながら語り、手を握りながら、「敦子さんと出会って、私はこれからの日本運命を平和と正義について、希望を抱いた」と語り、涙を流した。私は涙を流さずにはいられなかった。彼女が、笑顔で人へ手を差し伸べた瞬間、それは、戦時中、日本人の存在が、敦子さんからの思いの贈り物のように思えてならない。(つづき)

陸上選手、南部敦子さんの足跡を追う◇ 寺澤 美代子

19歳の彼女のほろほろとした姿と笑顔が、多くのフィリピン人の心に鮮烈な印象を残した。優雅でなめらかな身のこなし、他の選手に対する気遣い。何よりフィリピンに対する暖かい誠実な振る舞いが彼女の心を打った。彼女は彼女がフィリピンに写した写真に写ったように、それがどれほどすばらしいことだったかは、日

反日感情を打ち破った。だが、敦子さんの存在が、敦子さんの姉さん、わしらの対日感情を好転させたという。現地の新聞が連日大きく報道し、彼女

が、彼女がフィリピンに写した写真に写ったように、それがどれほどすばらしいことだったかは、日

反日感情を打ち破った。だが、敦子さんの存在が、敦子さんの姉さん、わしらの対日感情を好転させたという。現地の新聞が連日大きく報道し、彼女

2010年 9月21日(火)
日経新聞 朝刊